

## SER no.055; 序文

著者	関 雄二, 木村 秀雄
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	55
ページ	1-10
発行年	2005-05-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00009056">http://hdl.handle.net/10502/00009056</a>

# 序 文

関 雄二・木村秀雄

本書は、2004年2月21日に開催された藤井龍彦国立民族学博物館教授退官記念シンポジウム「歴史の山脈——日本人によるアンデス研究の回顧と展望——」の成果報告書である。またシンポジウムの発表者、参加者は、いずれも藤井龍彦教授（現名誉教授）が主宰し、関係してきた国立民族学博物館共同研究会「中央アンデス造形芸術の研究」や「ラテンアメリカ社会文化システム再考」（代表者 木村秀雄 東京大学大学院教授）の班員であり、発表内容も共同研究会で討議されてきたテーマであることからすれば、本書は共同研究会の成果報告とも位置づけられる。

シンポジウムは以下のように2部構成がとられた。

2004年2月21日（土）

10:00 挨拶 松園万亀雄（国立民族学博物館）

10:05 シンポジウム趣旨 関 雄二（国立民族学博物館）

第1部 アンデス研究の半世紀 司会：藤井 龍彦（国立民族学博物館）

10:15～10:45

日本のアンデス調査45年

大貫 良夫（野外民族学博物館リトルワールド）

10:45～11:15

考古学からの回顧と展望（西語）

ペーター・カウリケ（ペルー・カソリック教皇大学）

11:15～11:45

クロナカ研究の歩みと新しい試み

染田 秀藤（大阪外国語大学）

11:45～12:15

民族学からの回顧と展望—アルゲータスの亡霊—

友枝 啓泰（広島市立大学）

12:15～13:30

昼食

第2部 アンデス研究の最前線—歴史性をさぐる— 司会：関 雄二

13:30～14:00

先スペイン期アンデスの空間構造と「歴史認識」

坂井 正人（山形大学）

14:00～14:30

アンデスのラクダ科動物の利用に関わる通時的課題

—野性動物ビクーニャの合理的利用「チャク」とリヤマ・アルパカ家畜化に焦点を当てて—

稲村 哲也（愛知県立大学）

14:30～15:00

アンデス植民地美術史と「メステイソ」概念 —自己と他者のイメージをめぐる歴史の屈折—

岡田 裕成（福井大学）

15:00～15:15

休憩

15:15～15:45

中央アンデスの農村経済：ペルー，クスコ県の先住民共同体とアシエンタ

木村 秀雄（東京大学）

15:45～16:15

歴史の連続性と非連続性 —歴史的言説のせめぎあいの場としての異教徒（ヘンティル）神話—

細谷 広美（神戸大学）

16:15～16:45

磔刑のイエスが現れた —アンデス高地における聖所の形成—

加藤 隆浩（三重大学）

16:45～17:15

創り出す力 —ペルーの民衆芸術をめぐる—

藤井 龍彦（国立民族学博物館）

17:15～18:00

討議

上記の発表者の他，青木芳夫（奈良大学），大平秀一（東海大学），井口欣也（埼玉大学），オラシオ・ゴメス・ダンテス（同志社大学），佐々木直美（法政大学），鈴木紀（千葉大学），高橋均（東京大学），信岡奈生（駿河台大学），古谷嘉章（九州大学），北条ゆかり（滋賀大学），松本亮三（東海大学），横山玲子（東海大学）がディスカッサントとして参加した。

前半では，日本人によるアンデス研究の歴史を紹介するばかりでなく，考古学，歴史学，文化人類学の各分野から学術的回顧が行われた<sup>1)</sup>。東京大学文化人類学教室が主体となって発足した調査団が，南米アンデス地帯に初めて足を踏み入れたのは1958年のことであり，45年という日本の海外学術調査の歴史の中では長い歴史を持つ。これまでに考古学，民族学，歴史学，エスノヒストリーなどいわゆる人類学の分野を中心に多くの業績をあげてきた。こうした研究の回顧や評価は，これまでに行われてきたが，分野別で

あったり、総合的なものでも1980年代までの研究を対象にした回顧が最後である（加藤・関 1998; Kato 1991; Ochiai 1989; Onuki 2002）。その後の研究の展開を考えると、改めて近年までの成果について網羅的に回顧することは、アンデス研究の現在の位置づけを明確にし、また将来を展望することにつながると考え、シンポジウムの前半にこのセッションを設けた。

本書の冒頭を飾る論を寄せた大貫は、1960年より今日まで調査団に加わり、また率いてきた立場にあったことから、調査の歴史全体を見渡す報告を行った。資金の乏しい1960年代初期の調査の苦勞から、豊富な外部資金を得ながら現在進めている遺跡の保存と修復プロジェクトに至るまで、調査団の内的、外的成熟ぶりを追った内容である。しかし、話の底流には、常に現地社会との人的交流への努力が認められる。

この対象社会とのつながりを重視する点は、次のカウリケの論でも指摘されている。考古学分野をペルー・カソリック大学のカウリケが回顧したのは、現在、日本で活躍するアンデス考古学者のほとんどが東大調査団出身者であり、外部の人間による評価が必要と感じたからである。シンポジウムの開催当時、国立民族学博物館に客員教授として来日していたカウリケは、調査団同様に、古代アンデス文明の母体となった時期である形成期（紀元前2500年～紀元前後）社会を研究する考古学者であり、この役に適任であった。カウリケが日本の考古学調査団について強調した点は、的確なテーマ設定、卓越した発掘調査の技量、綿密な記述よりなる報告書の刊行、そして団員間、あるいは対象社会との信頼関係の樹立などである。ある意味で、団体として実施するフィールドワークという特殊な形態を推進するにあたっての姿勢やメリットの指摘ともいえよう。

この研究姿勢を仮に、「日本的なるもの」とするならば、こうした見方に懐疑の姿勢を示したのが、友枝である。シンポジウムでの担当は、民族学分野の回顧であったが、友枝は、「日本人研究者による」という視点、表象こそオリエンタリズムに通じる問題点として、この立場による回顧そのものを、あるいはシンポジウム第1部の趣旨自体を批判する。その代わりとして、欧米を含めたアンデス民族学者（文化人類学者）一般が陥っている解釈や発想の枠組みを、類い希なるカリスマ性を持ったペルーの文化人であり、民族学者であったホセ・マリア・アルゲータスの思想にまでさかのぼらせ、現在もアルゲータスの呪縛から解き放たれていないことを示した。

この「日本的なるもの」については、報告者ではないが、シンポジウムに参加した落合がコメントを寄せているので、本書の巻末に載せた。そこには、政治、経済的に欧米先進国に位置づけられる日本から欧米に乗り込む文化人類学者が、決して欧米の一員としてみられるのではなく、むしろ研究対象の社会の出身者と捉えられる一方で、当のフィールドの人々からは、欧米人同様に異質な研究者としての視線が投げかけられるという曖昧な立場にあることが指摘され、友枝の主張に対する違和感が表明されている。

歴史学の立場からの回顧は、アンデス社会がスペインに征服された後、記された文書

クロニカを専門的に研究をすすめる染田が行った。シンポジウムでは、日本におけるクロニカ研究の礎を築いた増田義郎らの手による大航海時代叢書（岩波書店）の重要性を指摘しながらも、主題は、近年「発見」されたといわれる古文書の真偽論争に置かれ、本書でもこの部分だけに限定した議論が行われている。回顧の趣旨からはずれるが、じつは、むしろそのずれこそが、第2部の「歴史性」の議論へのつながりを生み出す結果となった。

歴史文書が、書かれた時代や作者の思想的な背景を抜きに語れぬことは、歴史文書のクリティークでは常識化しているが、それを読みとり、解釈をしていく研究者自身が、場合によっては歴史文書の鑑定に関わらざるを得ない事態がここでは討議されている。否、歴史的眞実とは何であるのか、それがどのような行為によって決定されるのか、という研究者がテキストを通じて討議していることに自らが身を置くという錯綜した構図が見えてくるといった方がよかろう。そのため、染田の論は、本書においては、第2部に組み込むこととした。

さて第2部の発表論考を貫く「歴史性」について少し述べておきたい。今日、歴史が文化人類学的研究にとって不可欠の要素であることはいうまでもない。田中雅一によれば、文化人類学が歴史と接近していった過程は二筋あるという（田中 2003: 163）。ラドクリフ＝ブラウンにより提唱された西欧との接触以前の社会を再構成しようという立場は、フィールドにおける現在進行中の社会変化を射程におこうとしたマリノフスキーによって批判される。以来、民族誌的現在は、接触前から接触後へと時間軸をずらした時点へと移行し、いやがうえにもフィールド、すなわち植民地状況と対面せざるを得なくなった。しかし、この対象を、「権力の諸関係が交錯して形成される過程」（森 2002: 20）として捉え、植民地状況の中に自らの学問を位置づけるのは後代のことであった。すなわち植民地支配を支持する科学として文化人類学を批判的に論じようという動きは、1970年代になってエドワード・サイードの「オリエンタリズム」に通じる試みが生まれて以降のことなのである（田中2003: 164）。いずれにせよ、これ以降文化人類学は、異文化すなわち非西欧社会を記述し、表象してきた権力性に対する批判に基づいて学問を再考することが避けられなくなったのである。

こうして、先述したように、人類学が対象とする社会を不変の静的存在とみなしがちだったことに対する学問内部から出てきた自省ともあいまって、大きなうねりとなる。その結果、対象とするフィールドにおける過去の植民地時代、そして現在の植民地状況に注目するようになった。植民地状況をとりあげるには、欧米との歴史的関係やそれが引き起こす社会変化を無視することはできず、やがて文化人類学は歴史に導かれていき、現在では、多くの研究者がフィールドにおける参与観察につき込むのと同じ、あるいはそれ以上に公文書館で過ごす事態（田中 2003: 164）が生じてきたといえよう。いまや「人類学においては、歴史が人類学の研究対象であることは「あらためていうまでもない」

あるいは「問題とするほうがおかしい」といわれるようにさえなっている。」(森 2002: 21)と記され、「現代の人類学にとって、歴史研究の重要性はすでに周知のことであり、研究のテーマや内容についても、でそった感がある。なのに、いまなぜ歴史を取り上げるのか?」(春日 2004: 373)というような問題提起が行われるほど、この分野に歴史研究の意義は浸透している。

これほどまでに浸透しているかにみえる歴史の重要性を前に、あえてシンポジウムのテーマとした理由はなんだろうか。端的に言えば、従前の歴史に対する取り組み方を共通テーマとして意識化させることで、日本におけるアンデス研究がどこまで最前線であるのかの確認作業が必要であるという認識からである。たとえば考古学のように古代の歴史そのものの復元を目指す分野の場合でも、近年その学問的営みが持つ権力性を問うような視点が提示されるようになってきている<sup>2)</sup>。とはいえ文化人類学が敏感に反応する歴史の扱い方も、その重要性に対する認識や浸透度は学問領域毎に異なることも事実である。まずは、各分野における歴史の扱われかたを知る必要がある。

その意味でも、今回のシンポジウムでの試みは、一応の成果を得られたと確信している。そこには、友枝の言うように、これほどまでに植民地状況における権力性がとりざたされているにもかかわらず、いまだにインディオ擁護主義運動(インディヘニスム)のカリスマ的指導者の呪縛から解放されていない研究者の姿が浮き彫りにされたことも含まれる。

また共通テーマをもうけた理由は別にもある。友枝による批判はともかくも、日本におけるアンデス研究の場合、個々人の研究レベルは高く、また研究者同士の関係も問題はないのだが——これが誤解を生み出してきた——、分野横断的な研究連携は意外なことにもあまり活発ではなかった。実際、45年前、総合的視点をもって多分野の専門家が参加したアンデス調査団も、年を経るに従い、次第に専門化が進み、調査も個別化していったことは第1部でも触れられている。

もっとも日本における考古学と文化人類学の連携研究は、全くなかったわけでもなく、民博の共同研究会や国際会議(Masuda et al. 1985; Millones and Onuki 1994)なども開催されてきた。しかし、その方向性は、現代の人類学が批判的に検討している「伝統」を逆に掘り起こす作業であったともいえ、現代の研究動向を押さえた上での連携はその後あまり行われてこなかった。その意味でも、今回の分野横断的な研究集会の意義は大きいと考える。

さて本書の焦点となる中央アンデス地帯は、今日のペルー、ボリビアの一部にあたり、古代文明が誕生した場所である。また、その後16世紀の前半には、スペインによって征服され、長い植民地時代を経験してきた場所でもある。第2セッションではこの中央アンデスを舞台に、考古学から、歴史学、民族学の分野で活躍する研究者の論が集積されている。

第2セッションの最初は、坂井によるインカ帝国を対象とした論である。そこでは文字

を持たなかった先スペイン期の文化が、インカの起源神話など、いわば歴史を都であるクスコの都市空間に埋め込み、記憶していた可能性を示した。祭祀の中心的役割を果たした黄金神殿（コリカンチャ）やクスコの町の中心軸などが、起源神話や農耕に必須な水の源にあたる聖なる山々の位置と関連していることを提示している。このように文字に頼らない歴史の記憶装置を想定する論は、一定の説得力を持つが、この仕組みを保持し、読みとっていく方法、いわば持続性とそれを支える具体的集団の姿を見せていくことが今後の課題であろう。

続く、稲村は、近年復活を遂げた野生のラクダ科動物ビクーニャの追い込み猟「チャク」を取り上げ、この猟法が農民共同体の雇用を生み出すと同時に、環境保全や、孤立しがちであった農民共同体の統合へとつながる様相を描き出している。いわば伝統の現代的読みかえと再生が見て取れるわけだ。このテーマは、後段における飼育化のテーマとも結びつく。遺伝学の分野から川本の参加を得て、これまで乳の利用がないがために、世界の牧畜研究で等閑視されてきたアンデスの牧畜を積極的に評価している。先述の「チャク」にしても、野生動物へのアクセスが自由でなく、特定の農民共同体に帰属していることや、野生動物を管理している点に注目すると、野生動物の利用＝狩猟としてきた固定的観念にも疑義が呈せられ、新たな牧畜の分類や飼育化の過程が推測できるという。ラクダ科動物と人間生活との相関関係を歴史的に考察した力作といえよう。

岡田は、植民地美術の研究史を振り返り、ヨーロッパ美術と先住民文化の融合、いわゆるメスティソ概念を強調する立場とヨーロッパ美術の垂流とする立場を検証し、双方とも退ける。とくにメスティソ美術を推進してきた人々は、一見して先住民文化の積極的評価という姿勢をとりながらも、実は語る側と語られる側という非対称的な力関係に安住し、都合の良い先住民像を生み出してきたにすぎないという。いわばエリートとして国民国家形成に荷担し、国民的美学としてメスティソ美術を生産してきたのである。しかしながら、岡田によれば、この力関係の中で生み出されてきたものは、一方的なまなざしの照射ではなく、その視線を一旦受け止めた後に主体的に描いていく自己の世界像であるという。この錯綜した歴史的、観念的プロセスを解きほぐすこそメスティソ美術の理解につながるとしている。

木村は、農地改革（1969年）以前の先住民共同体とスペイン系住民の経営する大農場アシエンダとの関係を南高地ビルカノタ谷での調査によって丹念に追っている。結論として、先住民共同体は、植民地時代以来、生産性の高い土地を奪取され、根栽類の生産に適した土地に追いやられる点は事実としても、アシエンダの労働力として利用されるなど、相互依存関係にあるものすら見出される。このような世界的な経済、政治の流れの中で、先住民共同体の位置づけを行う必要があると説く筆者の言葉は、従来先住民社会だけを対象としてきた調査方法に警鐘を鳴らすものである。

細谷は、シンポジウムでは、ヘンティル（異教徒）が登場する語りをとりあげ、その

中に近代的歴史観、すなわちキリスト教や国民国家の歴史の介入を見ると同時に、それらを自分のものとして捉える話者の姿を論じた。しかし、このテーマでの論文はすでに公刊されていることもあり、本書では別のテーマが選ばれた。それは1980年代から90年代にかけてペルーを暗黒の時代に陥れたテロリズムであり、細谷はその被害者や犠牲者の家族にインタビューをし、虐殺の証言を記録する作業を近年進めている。いまだ作業途上といわざるをえないが、政府軍やテロ集団による殺戮がなくなった今日、重い口を開き始めた人々の語りを通じて、虐殺の記憶がどのように統合され、個人、あるいは集団の歴史的記憶として固定されていくのか、今後の分析が待たれる。

加藤は、カトリック世界でしばしば見られる「聖なるもの」の出現に注目し、すでに大信仰となったものではなく、ペルー南高地クスコ地方で信仰されるセニョール・デ・ウィンピリヤイという比較的歴史の浅い信仰対象を分析している。一地域の信仰ではあるが、歴史が浅い分だけ、成立過程を聞き取り調査から復元することができるという利点もある。論自体は、異話間の構造的対比と現象が起きた場所の空間的意味づけに終わっているが、筆者が最後に記しているように、この奇蹟のニュースが流布する過程、教会側の対応、当時の村落社会の政治状況が将来織り込まれることで、「聖なるもの」の成立過程がより明らかになると期待される。

藤井は、ペルーにおいて成立した民衆芸術を1) 農村社会が担うもの、2) 製作集団が特定でき、3) 社会的、宗教的な要請があって成立したもの、4) 素朴な美しさをもつもの、5) 自発的には表現力をもつもの、と定義づけた上で、北海岸のチュルカナスの焼き物、南高地アヤクチョの箱型祭壇、南高地クスコの首長人形という3つの事例をとりあげ、上記の定義に適合するかどうかの検証を行っている。各事例の成立過程を歴史的に追う作業は、フィールドワークによる聞き取りを基礎においており、その結果、定義に合致することが示される。しかし、それ以上に興味深いのは、定義の一つである地域性、地方性を越えて、汎ペルー的支持こそ民衆芸術の成立要件とする藤井の指摘であろう。いいかえれば、民衆芸術なるものは、先住民擁護主義運動であれ、観光開発であれ、国民統合やペルーらしさの演出の中で誕生するものであり、岡田の論ともつながる。

いずれの論も、扱う対象の違いはあっても、主体と客体との政治的力関係のもとに生み出されてきたアンデスの先住民イメージを歴史的視点、グローバルな視点を取り込むことで解体しようという試みといえることができる。

すでに冒頭で触れたようにこのシンポジウムは藤井龍彦教授（現名誉教授）の退官を記念して行われた。ここに藤井教授について触れておきたい。藤井龍彦教授は、東京大学文学部考古学科を卒業、同大学院人文科学研究科修士、博士課程を経て、1974年より国立民族学博物館助手（第4研究部）に就任し、助教授、ならびに教授を務められた。この間、第5研究部長、博物館民族学研究部長、先端民族学研究部長、さらには国立民族学博物館運営協議員を歴任された。さらに総合研究大学院大学においても併任助教授、教



授として大学院教育に従事し、比較文化学専攻長、文化科学研究科長、評議員の重職も果たされ、2004年3月に退官された。

こうした藤井教授の研究人生は、戦後の日本におけるアンデス研究の流れと重なると言っても過言ではなかろう。本書の第一部でも触れられるように、大学院生の頃より、東京大学アンデス地帯学術調査団の団員として南米ペルー国における考古学調査に参加した藤井教授は、早くから発掘という実践を修めたばかりでなく、出土遺物や遺構の分析に従事し、和文、英文での論文を発表している（藤井 1976a, 1976b, 1977, 1980; Fujii 1979a, 1979b）。調査団というチームでの研究ではあったが、今日、世界的にも評価の声が高い日本人によるアンデス考古学の礎、とくに実証的な部分を担った功績は高く評価できよう。

国立民族学博物館に勤務後は、文化史的関心（Fujii 1993）を持ち続ける一方で、同僚の友枝啓泰教授（現国立民族学博物館名誉教授）を中心として結成された民族学調査団に加わり、高度差によって生じる多様なアンデスの生態環境と、それに対する人々の適応というテーマを検証する作業を行ってきた。そこでは、従来、経済・生態学的側面から捉えられることが多かった高地牧民と、それより低い場所で暮らす農民との関係を、婚姻という社会関係で新たに見直すことを手始めに（Tomoeda and Fujii 1985; 友枝・藤井 1985）、これまで民族学では見過ごされてきた定期市（藤井 1987）、あるいは農民自身が著した行動記録の分析を綿密に行ってきた（藤井 1990, 1991）。とくに定期市で流通する品々に徹底的に執着した研究では、都市と農村を繋ぐ結節点、あるいは農民自身が自らの社会から解放される場所としての定期市の社会的役割を見出し、従来の生態学的観点では説明できない様相を析出してみせた点は大きい。行動記録の分析においては、通常民族学的調査にはなじまないとされる統計学的処理を慎重に組み込むなど、実証性にも配慮している点が藤井教授の研究の特色である。

また近年は、メスティサヘ（混血性）にも強い関心を示されている。スペインによる征服と植民地化という歴史的な重層構造を持つアンデス地帯では、先住民文化とスペイン征服以降の外来文化とが融合・接合する、いわゆる混血文化が生まれた。このメスティサヘの物質化の一面は、民衆芸術の世界で見ることができる。藤井教授は、この視点から、本書でも紹介されているようなペルー北部のチュルカナスの焼き物、中部アヤクチヨ地域の箱型祭壇、南部クスコ市サンブラス地区におけるさまざまな民衆芸術などに焦点をあてた調査を実施し、民衆芸術品の技術的起源、地域アイデンティティーとの関係などを明らかにし、現代社会に生きる人々が先スペイン文化を解釈する躍動的様相を表出させることに成功している（藤井 1997, 1998; Fujii 1998, 2000, 2003）。なお、この研究に基づき、標本資料の収集を積極的に行い、国立民族学博物館の標本資料を充実させることに努力した点も特筆すべきであろう。

このように藤井龍彦教授は、考古学から民族学にいたる幅広い「アンデス学」を構築

し、国立民族学博物館を、日本のみならず、世界の「アンデス学」のセンターとして注目されるまでに高められた。今回のシンポジウムの企画には、長年にわたってアンデス研究を牽引されてきた藤井教授に対する同僚からのささやかな感謝の意が込められていることを付け加えておきたい。

最後になるが、本書の刊行にあたり、論文を執筆していただいた研究者の方々に感謝したい。また膨大な編集作業を担当して下さった藤田京子さん、編集室の牧奈央子さんにも謝意を表したい。

## 注

- 1) 日本人によるアンデス地帯を対象にした研究は、政治・経済といった社会科学から自然科学まで幅広い分野において行われてきたが、その初めは考古学・民族学（文化人類学）研究である。以下、アンデス研究という場合、考古学・民族学・歴史学分野を指すこととする。
- 2) こうした考古学の人類的批判はイギリスの考古学者らが精力的に行っているが、その影響は考古学そのものの研究方法に影響を与えつつある。対象とする遺物、遺構を支配者同士、あるいは支配者と被支配者の権力をめぐるせめぎ合いの産物としてとらえる方法もその一つである。

## 文 献

藤井龍彦

- 1976a 「中央アンデス・ワスコ地域の石器文化」『国立民族学博物館研究報告』1(2): 272-304。  
1976b 「中央アンデス Middle Horizonの成立について」『国立民族学博物館研究報告』1(3): 565-591。  
1977 「中央アンデス地帯の染織文化——その文化史的観点からの一考察——」『国立民族学博物館研究報告』2(3): 590-604。  
1980 「南部ペルーアンデス西斜面地域の先スペイン文化」『国立民族学博物館研究報告』5(1): 83-120。  
1987 「中央アンデスの定期市——ボリビア領ラパス県高地部の事例——」『国立民族学博物館研究報告』12(1): 49-128。  
1990 「ボリビアの農民——農民の「行動の記録」の分析（その1）——」『国立民族学博物館研究報告』15(1): 349-391。  
1991 「ボリビアの農民——農民の「行動の記録」の分析（その2）——」『国立民族学博物館研究報告』16(3): 521-588。  
1997 「伝統の再生へ——ペルー北海岸、チュルカナスのやきもの——」『民族藝術』13:152-160。  
1998 「チュルカナスのやきもの」『季刊民族学』84:46-57、千里文化財団。

Fujii, Tatsuhiko

- 1979a Stone, Metal, Bone, And Shell Artifacts. In K.Terada (ed.) *Excavations at La Pampa in the North*

- Highlands of Peru, 1975*, pp.99-114. Tokyo: University of Tokyo Press.
- 1979b Some Archaeological Sites Around Corongo. In K. Terada (ed.) *Excavations at La Pampa in the North Highlands of Peru, 1975*, pp.167-172. Tokyo: University of Tokyo Press.
- 1993 El felino, el mundo subterráneo y el rito de fertilidad: Tres elementos principales de la ideología andina. In L. Millones and Y. Onuki (eds.) *El Mundo Ceremonial Andino* (Senri Ethnological Studies 37), pp.259-274. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 1998 Del arte folklórico al arte nacional: El caso de retablo ayacuchano. In L. Millones, H. Tomoeda and T. Fujii (eds.) *Historia, religión y ritual de los pueblos ayacuchanos* (Senri Ethnological Reports 9), pp.161-173. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2000 El arte popular en la ciudad del Cuzco y la identidad regional. In L. Millones, H. Tomoeda and T. Fujii (eds.) *Desde afuera y desde adentro: Ensayos de etnografía e historia del Cuzco y Apurímac* (Senri Ethnological Reports No.18), pp.149-157. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2003 La cerámica de Chulucanas: ¿El renacimiento de la tradición alfarería prehispánica? In L. Millones, H. Tomoeda and T. Fujii (eds.) *Tradición popular: Arte y religión de los pueblos del norte del Perú* (Senri Ethnological Reports No. 43), pp.45-66. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 春日直樹
- 2004 「いまなぜ歴史か——序にかえて——」『文化人類学』69(3): 373-385.
- Kato Takahiro
- 1991 Estudios andinos en Japón en los años 80: Balance y perspectivas. *Revista Andina* 9 (2): 487-511.
- 加藤泰建・関 雄二編
- 1998 『文明の創造力』東京：角川書店。
- Masuda, Shozo, Izumi Shimada and Craig Morris
- 1985 *Andean Ecology and Civilization: An Interdisciplinary Perspective on Andean Ecological Complementarity*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- Millones, Luis and Yoshio Onuki
- 1994 *El mundo ceremonial andino*. Lima: Editorial Horizonte.
- 森 明子編
- 2001 『歴史叙述の現在——歴史学と人類学の対話——』東京：人文書院。
- Ochiai, Ochiai
- 1989 Latin American Indian Studies in Japan: Minimum Information. *Latin American Indian Literature Journal* 5 (1): 92-98.
- Onuki, Yoshio
- 2002 Japanese Research on Andean Prehistory. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 3: 57-78. Tokyo: The Japanese Society of Ethnology.
- 田中雅一
- 2003 「親族研究における進化概念の受容——進化から受容へ」坂上孝（編）『変異するダーウイニズム：進化論と社会』pp.159-189, 京都：京都大学学術出版会。
- 友枝啓泰・藤井龍彦
- 1985 「中央アンデスの農民と牧民の結婚——パンパマルカ教区（アプリーマク県）婚姻登録の分析——」『国立民族学博物館研究報告』10(1): 196-226.
- Tomoeda, Hiroyasu and Fujii Tatsuhiko
- 1985 Marriage Relations Between Puna Runa and Llaqtaruwa: The Case of Pampamarca Parish, Apurímac, Peru. In S. Masuda, I. Shimada and C. Morris (eds.) *Andean Ecology and Civilization: An Interdisciplinary Perspective on Andean Ecological Complementarity*, pp.301-309. Tokyo: University of Tokyo Press.